

50084

教科書文庫

5
920
51-1946
01304 49534

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

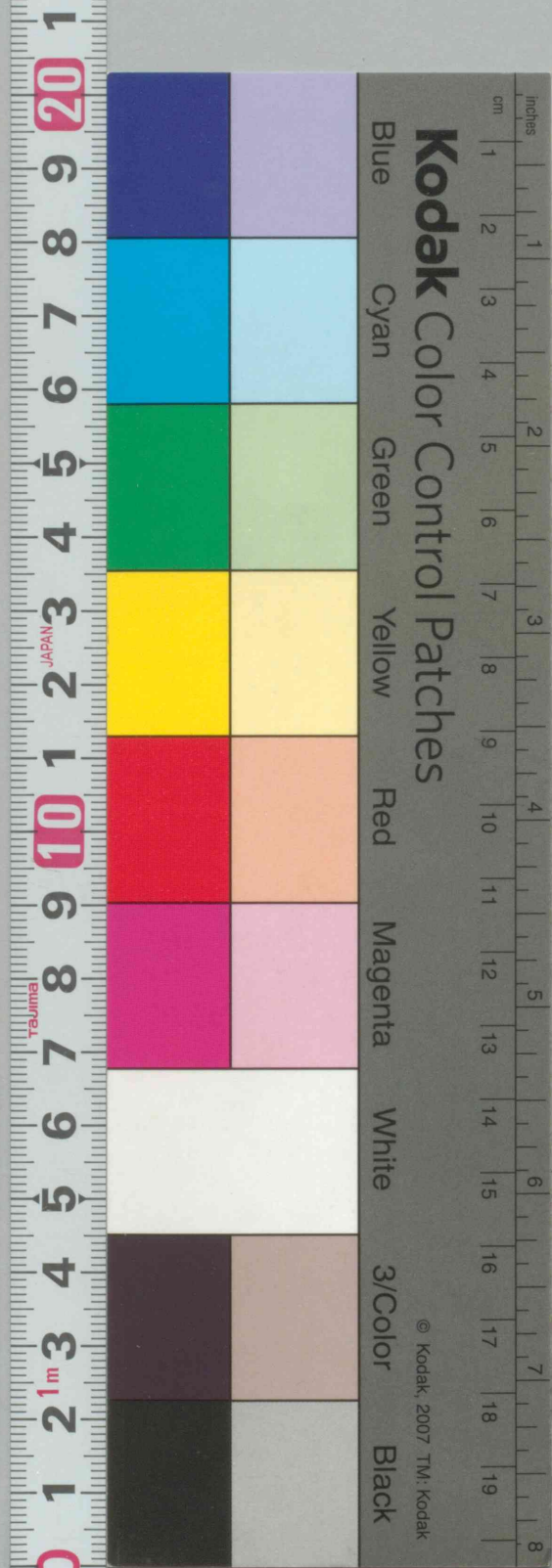


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



師範被服本科用二

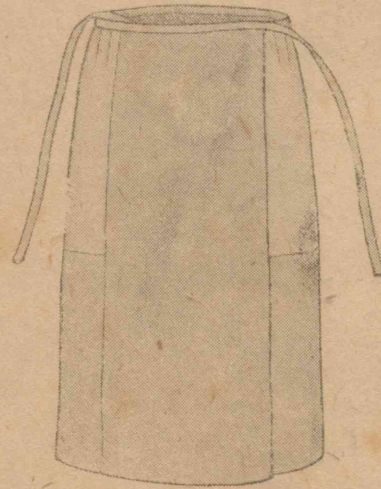
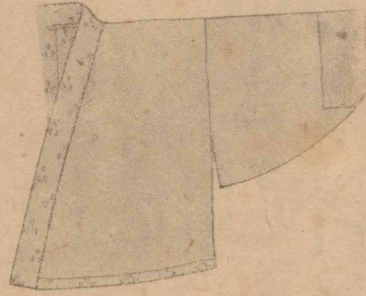
文部省

(第三綴)



るために二部式の長所は冬季用にあるといつてもよいからである。常時活動の必要と被服材料の節約と、また防寒のために、乙型上衣と活動的な下衣とを組み合わせさせて用ひる向も非常に多くなつた。女生徒活動基準服もその例である。この傾向はもとより生活環境に順應せんとするものであるが、一面質實剛健の氣風を表徴するものとしてまことに望ましいことといはねばならない。

一、形



二、材料

三、寸法

四、裁ち方

袖口・裾の衺は表が傷まない程度でよい。その他は夏季用による。

表

裏

○ 裏布の用ひ方の種々の場合について考へよ。

五、仕立方

イ、標附け方

上衣

袖

○ 表と裏との關係を述べよ。

身頃・衿

○ 衿として特に考ふべき點があるか。

下衣

○ 下衣衽附の場合の標附け方を問ふ。

第五章 平常着 冬季用

広島大学図書  
0130449534  
[Barcode]

ロ、縫ひ方

- 袖口合はせの要領を問ふ。
- 最も簡單で使用範圍の廣い四つ留はどんな方法か。
- 上衣の裾は表に見返りをつけるのと、表裏二枚一緒に折るのといづれがよいか。
- 下衣の背縫・脇縫を四つ縫にするのと、別縫にするのとを比較してその得失を述べよ。

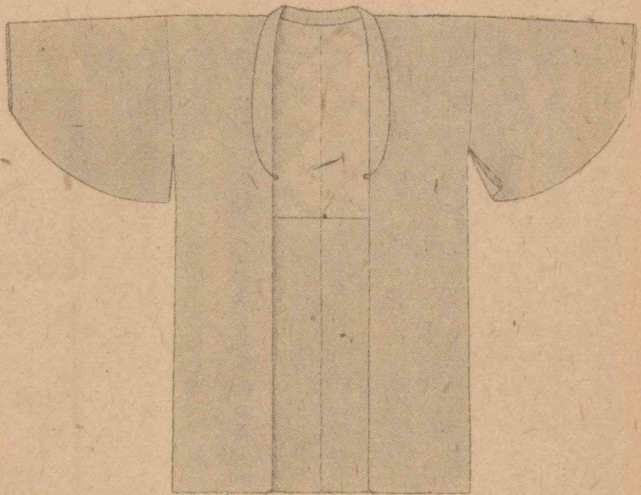
第二 女生徒活動基準着

單仕立として下着類を工夫して用ひてもよく、或は裕仕立・綿入仕立としてもよい。

第二項 羽織

羽織は、春秋冬季を通じて主に保温の目的で表着の上に着用するものである。これは氣温の變化、作業の關係などによつて手軽に着脱ぎ出来るので極めて便利である。多くは裕仕立にするが、用途によつては綿入仕立・單仕立にすることもある。材料は表の地質は長着の地質と同じであるが、色・柄はなるべく長着との調和を考へ、裏は滑りのよい地質で表との配合のよいものを選ぶ。

第一 綿入羽織（標準服乙型）



一、形

乙型の羽織は、資材の節約・更生、裁縫の簡易化について工夫したものである。形は小衿をつけて和らかな感じを出し、いづれの表着の上にも用ひられる。裕または綿入とし、用布の都合で無双にしてもよい。

備考 前下りを附け、また前身頃の端を丸くするなど適宜にする。

二、寸法

○ 長着との關係を考へ、各自の寸法を研究せよ。

三、裁ち方



- 圖の表の裁ち方に對し、裏の裁ち方を示せ。
- 表地一反で種々の裁ち方を考へ、それに必要な裏の裁ち方を示せ。
- 從來の羽織から更生する場合の布の用ひ方を示せ。

四、仕立方

イ、標附け方

- 綿入袖の標附け方は、袷の場合とどこが異なるか。
- 身頃の裾幅はどの位ひろげるか。これを前後でひろげるとその得失を比較せよ。
- 身頃と小衿の標附け方を、縮尺五分の一で圖示せよ。

ロ、縫ひ方

縫ひ方順序

含み綿

- 袖口・八つ口の綿の厚さはどの位にするか。
- 綿の分量及び入れ方を考へよ。
- 綿がない場合にはどう工夫するか。

綿入れ

袖口始末

前身頃 小衿下始末

表に綿を含め、釣合をとつて紵る。

小衿作り 小衿附ち附

- 小衿の作り方を問ふ。
- 衿附は衿を身頃で挟むのと、身頃を衿で挟むのといづれがよいか。
- 衿附はどんな釣合ひにするか。

五、仕上

第二 袷羽織(襷なし)

一、形

二、寸法

三、裁ち方

- 袷丈はどのやうに積るか。
- 裏布が八寸位不足の場合はどう工夫するか。

四、仕立方

イ、標附け方

- 仕立直しのものについての注意を問ふ。
- 袷の折り方を研究せよ。



ロ、縫ひ方

袖

身頃

- 前下りの縫ひ方についての注意を問ふ。
- 裾心の役目を考へ、入れ方を研究せよ。
- 袖はいつつけるか。
- 袷附の假綴をするにはどんな點に注意するか。
- 袷附について次の事項を研究せよ。  
 鈎合ひ 縫ひ方 袷先始末

五、仕上

第二節 通常着 (男子用)

第一項 表 着

第一 袷 長 着

一、形

二、材 料

三、寸 法

出來上り 單長着に倣ふ。

○ 裏の裁切り身丈はどうきめるか。



四、地 直 し

五、裁 ち 方

○ 裏布の裁ち方を縮尺二十分の一で示し、相互に研究せよ。

六、仕 立 方

イ、袖

○ 裏袖幅の不足の場合はどうすればよいか。

○ 袖口布の両横の始末はどうするか。

○ 袖附との関係を考へて、袖下はどう縫へばよいか。

ロ、身頃・衿・衿の標附

○ 裏の標附け方を縮尺十分の一であらはせ。

ハ、表身頃縫

背縫・内揚・脇縫縫込の始末

ニ、裏身頃縫

第五章 平常着 冬季用

背縫・揚・脇縫込の始末

○ 揚の始末を圖解してみよ。

ホ、身頃の裾合はせ 背及び脇の縫綴 衿附の假綴

ヘ、袖附

○ 裏の袖附の留はどうするか。

ト、衿の袖合せ・衿附

○ 衿附の四つ縫の注意を述べよ。

チ、衿下

リ、衿附・衿先・衿紘・掛衿かけ

○ 衿先の始末はどうするか。

ヌ、裾綴

七、仕上

第二、丹前

一、形

丹前は防寒用家庭着として用ひられる。随つて綿を多く入れて温かく作る。

○ 丹前にはどの位綿を入れらよいか。

イ、袖の形は潤袖の他既習のものを適宜用ひる。

ロ、袷先は角袷に作ることもある。

二、材料

従来は表は小柄の縞、裏は黒又は紺色の木綿・金巾の類を用ひてゐた。また袖口布と掛衿は黒八丈を用ひてゐたが、共布を用ひてもよい。綿も従来は普通丹前綿と稱する厚手のものを用ひてゐた。

三、寸法

身丈 長着に同じ

袖丈

袖附

後幅 長着に二分六厘加へる

第五章 平常着 冬季用

前幅 長着に二分六厘厘加へ

る

衿幅

衿肩明

長着に〇・五厘厘加へ  
一分三厘厘

る

衿下り

衿下

長着に同じ

衿幅

袖口衿

裾衿

〇・五厘厘乃至二分六厘厘  
一分三厘厘乃至二分六厘厘  
二分六厘厘乃至五分厘



四、地直し

五、裁ち方

六、仕立方

イ、縫ひ方順序

○ 縫ひ方順序を考へよ。

ロ、綿入れ

袖口・裾などは他よりも綿を厚く入れる。

袖口の綿含め

含め綿の作り方は、出衿〇・七厘厘位ならば幅一寸寸位のものと五分厘位のものを袖口丈より二分六厘厘位長くとり、これを二枚重ねて二つ折にして、含めて綿綴をする。

(厚手ならば一枚でもよい。)

綿綴は、綿がよく含まつて落ちつくやうに、針目のあらさ加減や綴ぢる位置などに注意する。

○ 表針の間隔はどの位が適當か。また綴ぢ方はどうすればよいか。位置はどの邊がよいかなどについて工夫せよ。

布の置き方

布の表裏を出して表裏別々に夜着疊みとし、表の後身頃を出しておく。

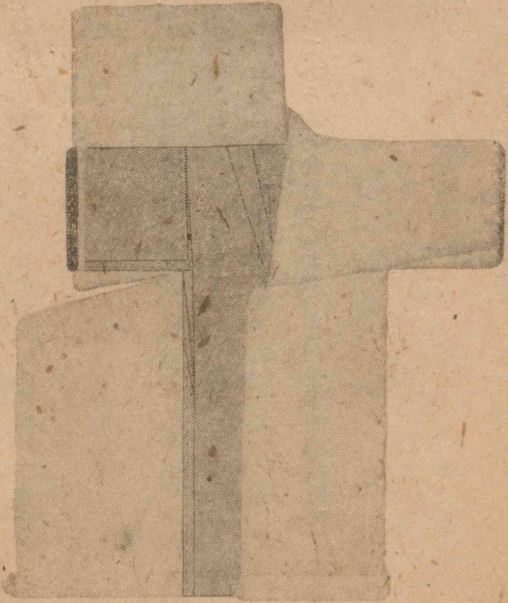
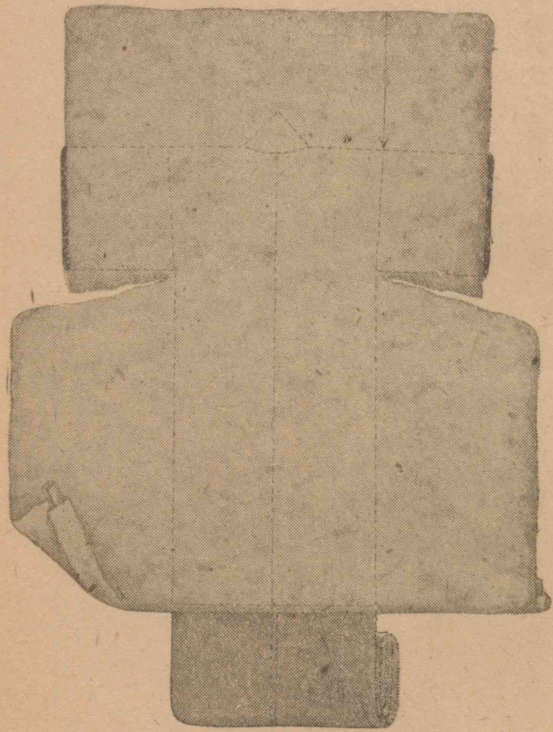
綿の扱ひ方の一般注意

もめん綿を入れる場合は、綿の両面に極く薄く眞綿を敷くとよい。



○ 眞綿を敷く順序とこれが注意を述べよ。

一般に綿を入れるには厚味を平均に、またつれないやうにすることが大切である。後身頃と前身頃の綿の入れ方は圖のやうにする。



裾綿は袖の部分の厚くし、自然に厚味を接ぐやうにつくる。

○ 裾綿の折返し方は圖のやうに表布側に折る。それは何故か。

○ 三枚の綿を用ひる場合、その置き方と接ぎ方はどうするか。

○ 古綿を用ひる時の注意を述べよ。

表返し・引合ひ 半身づつ表返しをなし、綿の落ちつくやうに引合をし、裾襷をとと

のへて假綴する。

- 返す時にはどんな點に注意すればよいか。
- 引合ひの仕方及び落ちつけ方の要領を問ふ。
- 一種襷の綿入棲について次の事項に答へよ。

標の附け方

表裏の縫合はせ方

棲先の綿の作り方及び入れ方

衿下の整へ方

- 全體の綿の厚さと襷綿との關係、襷綿と襷の寸法との關係を研究せよ。

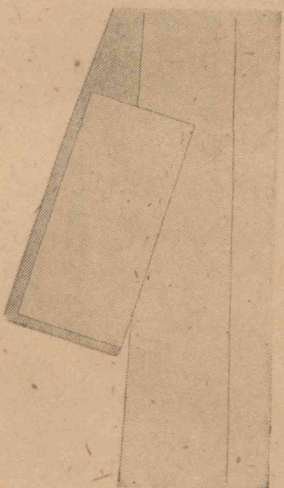
### ハ、衿綴・衿下

衿下の端の綿をととのへ、裏に含めて綴ぢ、表裏を衿合はす。

- 締る時はなるべく綿を抄はないやうに注意する。何故か。
- 衿下と衿先の境の綿の始末はどのやうにするか。また衿下の綿綴はどのやうにするか。
- 棲先七寸八分程縫つてから綿を含めてもよく、また衿下同様に締てもよい。いづれが仕易いか比較してみよ。

### ニ、衿綴・衿先・衿紵

- 裏衿のつくものは、圖のやうに裏衿の表に針目を出して綴ぢるとよい。何故か。



ホ、袖口紵・袖下綴

ヘ、背・脇の縦綴

- 縦綴の注意を述べよ。

ト、掛衿

七、仕 上

- 適當な疊み方を示せ。

第二項 袴羽織 (襠あり)

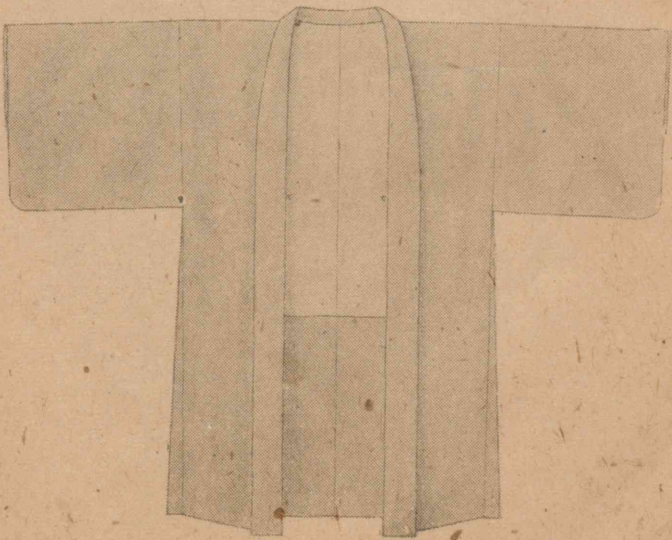
一、形

男物は一般に襠をつけて身幅にゆとりを作り、袖は角袖・筒袖など適宜でよい。なほ男子の羽織は、儀禮の場合には四季を通じて着用する。

二、材 料

三、寸 法

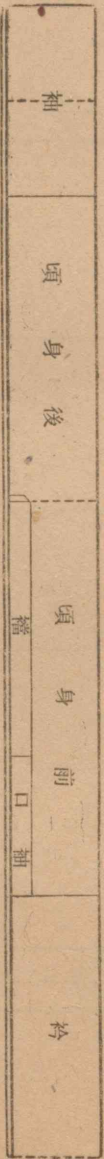
- 長着との関係について考へよ。
- 體格により、男女により、寸法のきめ方の異なる理由を考へよ。



四、地 直 し

男物は、表地に黒または濃色の無地を用ひることが多いから、地直しの際、鍔等の用ひ方に注意を要する。

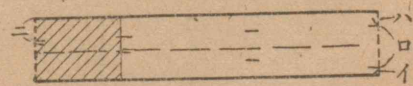
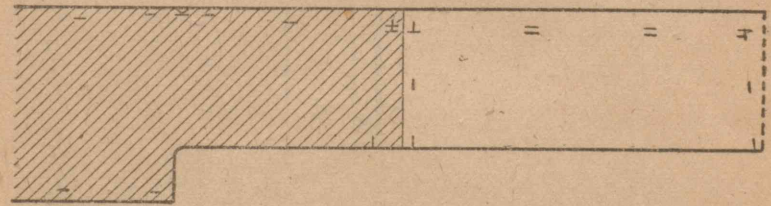
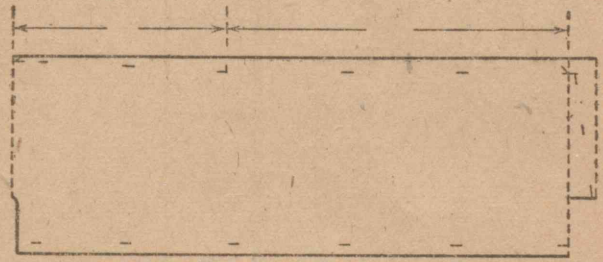
五、裁 ち 方



- 前の裁切身丈をきめるにはどうするか。
- 裏の裁ち方を示し、寸法を記入せよ。

六、仕 立 方

イ、標 附 け 方



○ 前襟附の縫ひ代を一ぱいにするのは何故か。

ロ、縫ひ方（袖ひらき附）

身頃 胴接ぎ 背縫 前下り縫

後襟附 身頃で襟をはさんで四つ縫にする。

袖 袖口布掛及び袖口合はせ。

袖附及び八つ留 標通りに表裏袖をつけ、袖附止りを八つ留にする。

袖 袖口四つ留 袖口下及び袖下四つ縫

前襟附

ち附

衿附

袖開き附・衿袋附にする場合

一、身頃

二、後襟附

三、衿附

イ、衿附の假縫及びち附の後、衿の表裏で身頃を挟んで一度に縫ふ。但し衿肩廻しのところを返し口にする。

ロ、衿先及び返し口の始末 衿先を始末し、衿を引返して返し口を締める。

第五章 平常着 冬季用

- 四、袖 袖口布掛及び袖口合はせ
- 五、袖附 裏袖は前の方を 三十種 八寸位縫ひ残す。
- 六、袖 袖附八つ留、袖下縫。
- 七、前襟附
- 八、前裏袖の返し口の始末

女物に襷を付ける場合

襷上幅 一・五種 四分 下幅 六種 一寸六分

○ 女物の衿を袋附にする場合の縫ひ方を考へよ。

### 七、仕 上

○ 裏に廣幅物を用ひる場合、裁ち方・仕立方にどんな違ひがあるか。

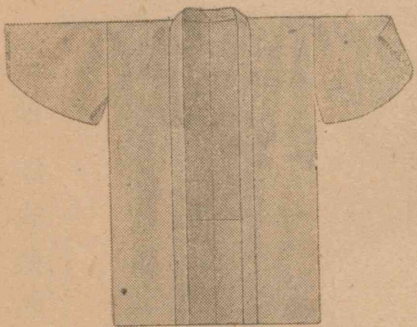
### 八、着用及び手入

○ 羽織の傷み易いのはどんな個所か。

○ 仕立替の際の布のくりまはし方について考へよ。

備考

半纏は羽織よりは更に簡易なもので、袖は既習のうち適宜なものにする掛衿は普通黒縹子、黒八丈などを用ひるが共布にしてもよい。半纏は農村などでは防寒用として一般に用ひられてゐる。



### 第三節 洋式標準服

保温上、形を工夫するは勿論、重ね着することも必要である。随つて表着については寸法などを考慮することが大切である。一般には單仕立のものが便利であるが、材料によつては、袷仕立或はこれに充填材料を用ひる。なほ保温上、下着について工夫することの必要あるはいふまでもない。

○ 保温に適當な形を圖示せよ。

#### 第一項 表着 (婦人標準服甲型)

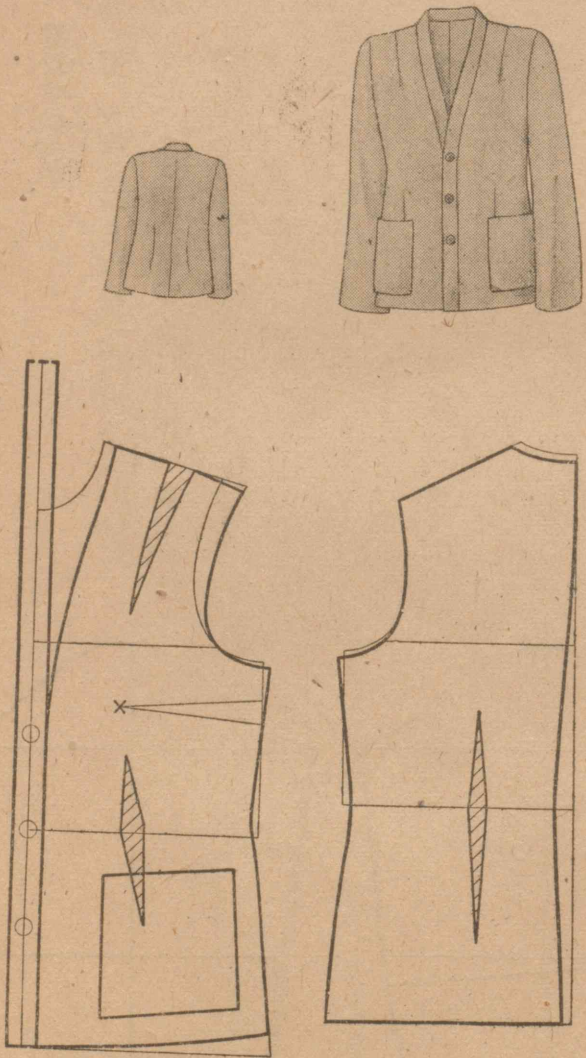
- 冬の平常着として一部式・二部式の得失を比較せよ。
- 下衣を袷にする場合の裏布の選び方、縫ひ方を考へよ。
- 充填材料にはどんなものを用ひるか。

#### 第二項 羽織

次のやうな形は、婦人標準服甲型等の場合に羽織るものの一種で、和服の羽織と同様わが國の春・

秋・冬には便利なものである。又和服の羽織類を用ひてもよい。

○ 和服の羽織を婦人標準服甲型の上に用ひる場合には、どう工夫すればよいか。



一、形・材料

二、型紙のとり方

身頃 原型を基として幅〇・五<sup>種</sup>乃至二<sup>分</sup>五<sup>種</sup>を出し、丈は腰を覆ふ程度にのばす。胴廻り及び裾のゆるみは全體で一<sup>寸</sup>六<sup>分</sup>位になるやうにし、胴の餘る分は圖のやうに縫ひ消しをとつてもよい。

衿ぐり・袖ぐりもやゝ大きくする。圖のやうに肩にクセを入れ、縫ひ消す。脇線は後に動かしてもよい。

袖 袖ぐりの不足分を幅に出し、袖口を定める。縫ひつまみは縦に入れてもよく、或は肱のところ、圖のやうに八<sup>分</sup>位開いて

横につまんでもよい。

衿

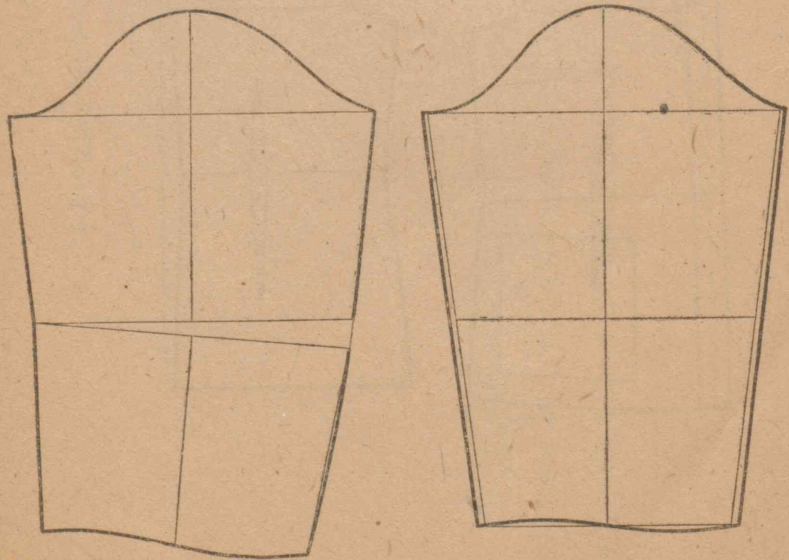
衿幅 三<sup>種</sup>位  
八<sup>分</sup>

三、布の裁ち方

四、仕立方

和服並びに婦人標準服甲型ともに、その形・色柄と着用者との關係については、夏も冬も同じ要領で考へてよい。

羽織類の甲乙兩型或は羽織・半纏等の一致にはなほ考案の餘地がある。



### 第六章 外被類

外被類は、主として防寒・防雨のために表着・羽織等の上に着る被服である。随つて材料・形態などは、それ等の用途にかなふやう工夫せねばならない。

防寒用材料としては、保温性に富み適度の通氣性を有するものがよく、厚地の毛織物・添毛織物などがこれに適してゐる。しかし今日かゝる材料に依存することは困難であるから、和服と同様の生地を利用して充填材料等に工夫を加へるとよい。防雨用材料としては、毛織物のやうな浸潤性の小なるものが適してをり、特に防水加工を施したのも用ひられてゐる。

形態は、外被であるから適當なゆとりを持ち、且つ着脱ぎに便利なやうにすべきはいふまでもなく、なほ和服の上にも標準服の上にも適宜に着用出来ることが望ましい。なほ防水加工を施したものは一般に通氣性に乏しい缺點があるから、これを補ふやうに工夫する必要がある。

#### 一、形

#### 二、寸法

身丈	羽織の丈より <small>三厘</small> 八分位長くする。
前下り	<small>二厘</small> 五分位
後幅	長着に同じ。なほ裾で <small>一・五厘</small> 四分位擴げてよい。
前幅	脇線は上で後の標より <small>二・五厘</small> 二分位つめる。
堅衿下り	<small>七厘</small> 一寸八分位
堅衿幅	<small>一・五厘</small> 四寸位
小衿下り	<small>三・三厘</small> 八寸七分位
小衿幅	<small>六厘</small> 一寸六分位

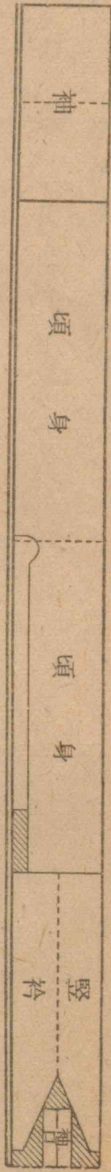
その他の部分は表裏又は羽織の寸法によつて加減する。





三、地直し

四、裁ち方



- 各自の寸法に基づいて衿ぐり及び小衿の型紙を作成せよ。
- 表地並幅一反を用ひて各自のものをつもつてみよ。また裏用布は何程必要か。
- 長着又は羽織から更生する場合について考へよ。

五、仕立方

イ、標付け方

袖

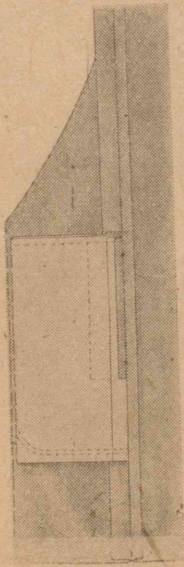
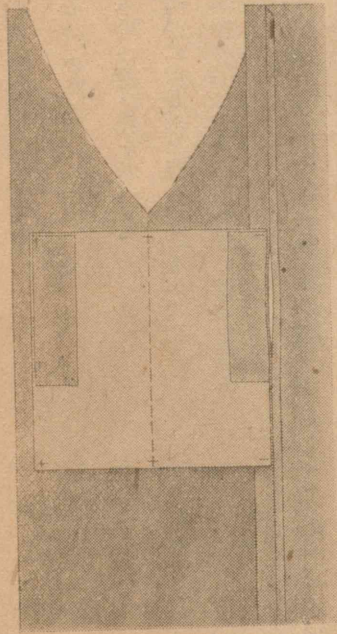
身頃・堅衿……身頃は羽織に倣つて標をつけ、堅衿は幅を二つ折にして丈及び幅の標をつける。なほ下前の表堅衿附には物入口の標をしておく。

ロ、縫ひ方

縫ひ方順序

- 縫ひ方順序を考へよ。

物入付け



裏布又は別布を用ひ、圖のやうに口布をつけ下前の堅衿につける。なほ上部の縫ひ代は後で堅衿の裏に綴ちつける。

ハ、小衿及び小衿附

- 小衿の縫ひ代を考へよ。
- 衿心にはどんな布を用ひるか、又衿心の入れ方、綴ち方はどのやうにするか。
- 小衿の附け方及び縫ひ目の始末を問ふ。

外被は前記のもの外、既習の作業用外被を應用して製作するもよい。

Approved by Ministry of Education  
(Date Oct. 31, 1946)

昭和二十一年十一月五日  
昭和二十一年十一月五日  
昭和二十一年十一月五日  
昭和二十一年十一月五日  
昭和二十一年十一月五日  
昭和二十一年十一月五日  
昭和二十一年十一月五日

著作權所有  
發行所  
著作權  
文部省

昭和二十一年十一月五日  
文部省検査済

發行所

印刷者

東京都牛込區市谷加賀町二丁目十三番地  
大日本印刷株式會社  
代表者 佐久間長吉郎

翻刻發行者

東京都神田區錦町一丁目十六番地  
師範學校教科書株式會社  
代表者 森下松衛

東京都神田區錦町一丁目十六番地  
師範學校教科書株式會社

師範被服本科用卷二  
定價金壹圓五拾錢

広島大学図書

0130449534

